

陶工
大阪市立クラフトパーク運営企画委員・陶芸工房講師

さいねん あきお
西念 秋夫さん



プロフィール

1948年、大阪府岸和田市生まれ。15歳で陶芸家の加藤泥二さんに師事。高校卒業と同時に神戸・六甲の陶芸教室の講師となる。2年後、独立のため退社するが、泉北地区で行われていた陶器古窯跡群発掘調査の調査員を依頼され参加。71年、西念陶器研究所開設。76年轟窯併設。陶器古窯復興のため「泉州焼」のブランド化にも取り組む。また障害者自立支援のための陶芸活動も。受賞暦は日本伝統工芸展入選ほか多数。98年から大阪市立クラフトパーク運営企画員、ならびに陶芸工房の講師を担当。



クラフトパーク創作教室 陶芸専門コース受講生作品の窯出し風景

「須恵器発祥の地」を全国に発信 泉州焼を地場産業に育てたい

本誌「ミュージアム情報」でも馴染みの大阪市立クラフトパーク。大阪に伝わる手づくり文化の総合施設として木工・金工染色・織物・ガラス工芸・陶芸と多彩な分野で充実した工房を備え、人々とクラフトとの出会いや、創造する喜びを育む空間として親しまれ、設立7年目の夏を迎えている。

工房のひとつ陶芸工房は、ガス窯や電気窯など7基を備え、各種クコによる「成形」から「素焼き」、「絵付け」、釉薬（上薬）をかける「施釉」を経て、「本焼き・窯出し」までの工程を段階的に学べる施設だ。同工房では、作陶経験の有無に関わらず基礎コースからスタートし、本科修了後に専科または専門コースに進める。

この専門コースで、開設当初から講師を務めているのが、陶工の西念秋夫さんである。

西念さんによると同工房は、単に成形して他人が焼き上げたものを持ち帰るといったやり方ではなく、「土作りから窯出しまでの一連の作業を、全てマスターしてもらえよう整備された工房」なのだ。

専門コースは水曜（夜）と土曜（朝）。「約40人が日本で一番古い窯業技術に

よる須恵器の技法や、日本六古窯にあげられる信楽や備前焼などを学んでいます」。好評なのが「かんてき（コンロ）窯」だ。「かんてきで焼くんです。これを覚えれば、自宅でも日本中どこでも焼ける。かんてきと土さえあれば、立派な窯元です（笑）」。

中学時代に 押掛け弟子入り

西念さんが焼き物を始めたのは、中学1年生の3学期のころ。「石膏レリーフの美術実習で残った粘土と石膏を利用し、自宅にあったレンタンコンロを使って小さな飲みを作った」。12歳、台所にあったコンロでの開窯だった。

だが、すぐに素焼きだけでは物足りなくなり、ガラス瓶を砕いて釉薬を自作するまでに。自宅からそう遠くない陶芸家加藤泥二さんの窯を訪れたのが中学3年生のころ。まもなく押掛け弟子入りが許され、中学、高校時代を通じて陶芸家への修行を積み重ねることになる。

その後20歳で開窯準備中に「たまたま見学に出かけた泉北丘陵の陶器古窯跡群（須恵器窯跡）発掘調査現場で、調査への参加を勧められ、製作技法の分析

や復元などに携わった」という貴重な経験を持つ。

泉州焼を地場産業に

2年後、創作活動を始めるのだが…。心を揺さぶられ続けていたのが、発掘調査に関わった「陶器」の存在と、「かつて陶器が日本の窯業発祥の地であったことを後世まで伝えたい」という強い思いだった。以後20数年。土を「泉州土」、作品を「泉州焼」と命名し、地場産業に育てるべく活動を続けている。

そうした活動の一環に、障がい者の自立支援がある。西念陶器研究所開設以降、障がい者の雇用を進めていたが、88年には研究所敷地内に、地元の社会福祉法人と共同で授産施設を開所。現在では、関連施設を含め約100人が土作りや作陶だけでなく、薪づくり・販売にも参加するなど、成果を上げている。

「私の天命です」と前置きして西念さんは強調する。「泉州の土を全国に発信して須恵器発祥の地をPRし、泉州焼を地場産業に育てたい」と。

（文・脇本勤 / 写真・高島悠介）